

顔の見える原子力白書



内閣府 原子力委員会委員

秋庭 悦子 (あきば・えつこ)

早稲田大学商学部卒業。NPO 法人あすかエネルギーフォーラム理事長、(社)日本消費生活アドバイザー・コンサルタント協会常任理事などを経て、今年1月より現職。

4月9日、平成21年度版原子力白書が閣議で配布され、その後、一般に公表された。「原子力利用の新しい時代の始まりに向けて」というサブタイトルの本年の白書は、政権交代と原子力政策、地球温暖化対策や放射線利用など社会的課題に対する貢献、核不拡散、研究開発の4つに分けて概観している。特に、政権の新成長戦略(基本方針)における「グリーン・イノベーション」や「ライフ・イノベーション」に対して原子力が果たしうる貢献と、核不拡散や核セキュリティに対する認識の世界的な高まりを中心とした平成21年の国内外の原子力に関する動向と、今後に向けての課題を記載している。

既に手に取られ方も多いと思うが、近藤委員長をはじめ5人の原子力委員の顔写真入りのコラムに「おや?」と思われたのではないだろうか。本年の白書は、1月に就任した新しい5人の原子力委員会として初めての白書になるため、委員の考え方が伝わるような工夫をしている。いわば「原子力委員会の顔の見える白書」である。また、できるだけ多くの国民に読んでいただきたいとの思いから、初めて「ですます調」を取り入れた親しみやすい記述になっている。ちなみに私のコラムは「高レベル放射性廃棄物処分の必要性と広聴広報」で、国民への分かりやすい情報提供と双方向コミュニケーションの必要性について書かせていただいた。さらに、今回は原子力委員が自らマスコミ関係者に説明を行う機会を増やすなど積極的にPRに努めた。

白書は原子力について知るには最適な教科書であり、一家に1冊は置いていただきたいと願っているが、なかなか発行部数が増えないのが現状である。そういう私も実は毎年購入していたわけではない。原子力を専攻している学生や関連業界の方々とはともかく、一般の消費者には内容も難しそうに見える上に分厚くて値段も高いので、敬遠されるのではないだろうか。来年度はさらに分かりやすく、読みやすくする工夫を考えたい。

そもそも白書とは何なのかネットのフリー百科事典で調べてみた。英国において、内閣が議会に提出する公式報告書をその表紙の色からホワイトペーパーと通称していたことから、日本でもそれに倣って政府が作成する報告書の通称を白書と呼ぶようになったとのことである。また、白書には「法定白書」、「非法定白書」、「それ以外の白書」の3種類あるが、原子力白書は閣議で了解を得た上で発表する「非法定白書」18のうちの1つである。そして、白書のうち最も発行部数が多いものは「防衛白書」であり、2006年の資料では4万5,296部発行されている。次いで「厚生労働白書」「中小企業白書」「環境白書」が続き、原子力白書は45白書のうち残念ながら36位で、発行部数は4,500部。防衛白書と桁が違うのは、産業の裾野が違うためだろうか。

私は消費生活アドバイザーの受験対策講座で「地球環境・エネルギー需給」の講師をしていたため、環境白書や循環型社会白書、エネルギー白書を購入していた。そして毎年開催される「環境白書を読む会」に参加していたが、これが企業の方や市民グループに大人気で早々に申し込まないと満員で断られることもあった。執筆者がその年の特徴や工夫などについて熱く語り、質問に答えてくれることが好評である。原子力白書もこのような「読む会」を開催してはどうだろうか。原子力委員が白書のコラムだけでなく、直接消費者と語り合うコミュニケーションの場が大切であると思っている。残念ながら原子力委員会の存在そのものを知らない消費者も多いのが現状だが、少しでも消費者との距離を近づけるためには、本当の意味で「顔の見える原子力委員会」になる必要がある。そのために広聴広報の仕組みを考え、実行したいと思っている。

(2010年 4月18日 記)